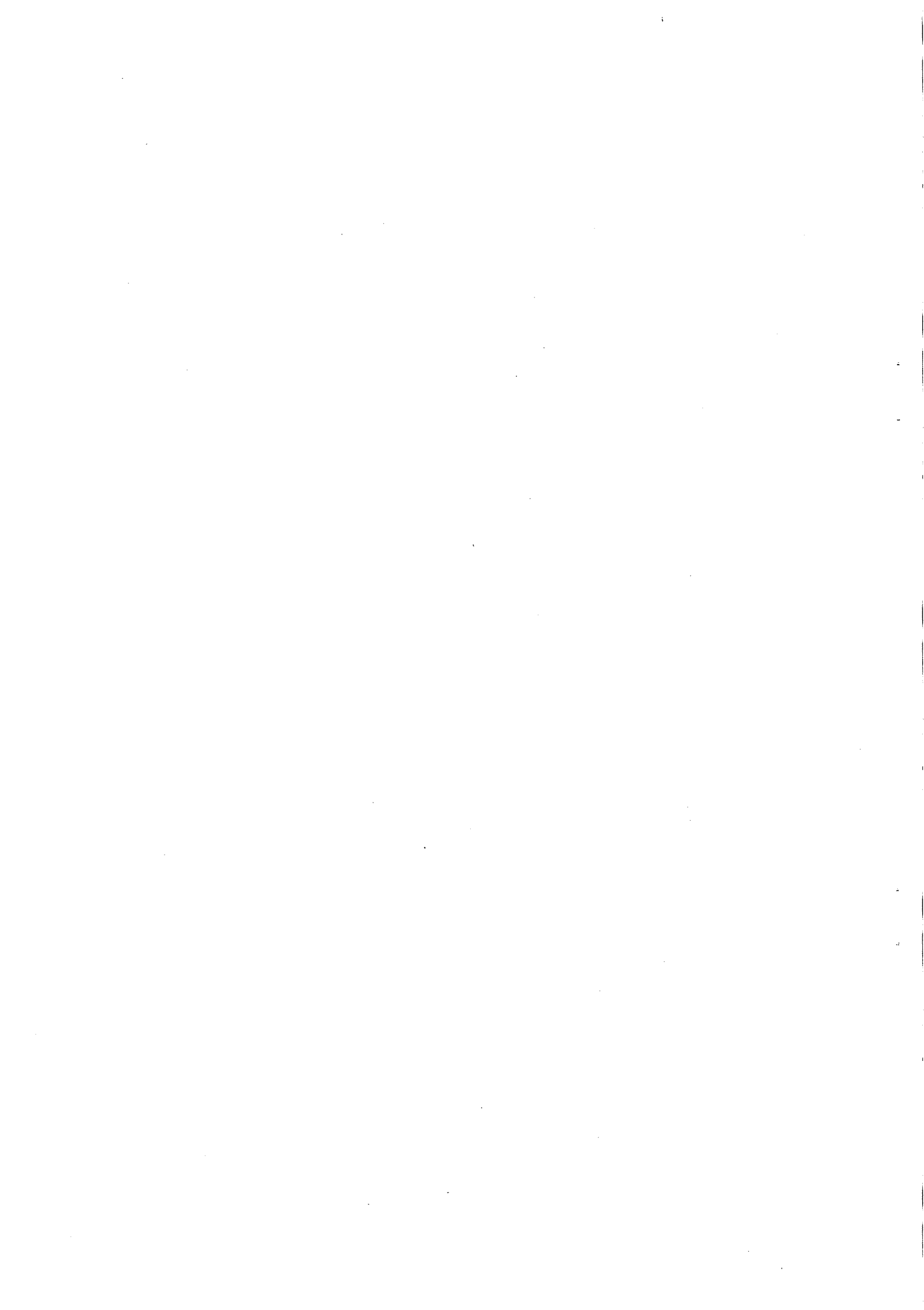


## 2020年度入学試験問題

# 国語

(試験時間 15:00～16:00 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きには使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないようにしてください。
7. 一度記入したマークを修正する場合、しっかりと消してください。消し残しがあると、マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。



一 次の文章（初出一九八二年）を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

言論はいうまでもなく一個の政治である。話し言葉であれ書き言葉であれ、言論は混沌とした未来に挑んで、そこになにほどの秩序を形づくる。秩序を形成するのは権力の営みにほかならず、そして権力は自らの正統性を信じていることができる場合に発動される。つまり権力は権威の中から生まれてくる。このような意味合いにおいて、言論は政治である。というよりも政治の本質こそ言論にある。政治の本体をなす説得とは、自分が正統とみなす権威にもとづいて、既存の秩序を拡大したり修正したり固定したりする言論行為のことである。要するに、程度の差こそあれ、すべての言論人は権力者であり、すべての権力者は言論人である。

いままで、いわゆる知識人は自分の政治性について鈍感であった、あるいはそれを隠蔽してきた。権力の場合から身を遠ざけて、真実の発見と情報の伝達に専念するというふうには、彼らは振舞ってきた。たとえそれが擬態であり、ひそかに権力と通じ合っていたのだとしても、知識人にあつて、政治は人間の悪徳と不可分なものだとみなされがちであつた。むしろ、そうみなし続けることができるかどうかには、知識人たることの正統性が求められていた。そして言論と政治の間の内的なつながりに眼をつむった結果として、権力に対する高踏的なもしくは無責任な批判だけが知識人のなす唯一の政治となつた。

しかし、知識人のこうしたひとりよがりな風習もようやく終わりつつある。昨今、言論の政治性がむき出しにされつつある、と私は思う。ほとんど一切の言論が、白昼公然と、政治的効果をねらいはじめた。政府、企業、学界、出版界、その他あれこれの領域において、言論という名の権力をめぐる費用・ベンエキがことごとまかに計算されている。

言論が己の政治性に目覚めるのは仕方のないことであり、うなずけることである。まして国際的にも国内的にも時代が政治の季節を迎えているとなれば、なおさらである。だが、言論が政治に淫するとき、それを乱用するとき、野卑と呼ぶのが適切なよきな雰囲気や言論を支配する。偏見、短絡、詭弁、恫喝、衛示、誇示がはびこれば、言論のよつて立つ基礎であるはずの人々の信頼関係が崩される。そうなれば、他者および自己を理解するのに必要な、ねばり強く控え目な懐疑と弁証の風習が失われ、そ

のうちに政治の底が抜ける。<sup>(3)</sup>

いま進行中の言論の悪しき政治化は言論の党派性と同じではない。言論の党派性ならば別に新しいことではない。党派性の内実が溶解しつつあること、それが現在の特徴なのだと思う。正統の信念体系が強固でなければ、異端の信念体系も鍛えられない。正統と異端の別を問わず、様々のイデオロギーはますます形骸となりつつある。保守も革新も、自由も平等も、ひいては学問も芸術も、信念と呼ぶにふさわしいような精神の凝集をもつて追求されてはいない。

リアルに存在しているのは技術である。ほとんど誰しもが、社会の仕組みも個人の生活も、結局は、技術的効率性という基準によって律せられるのであろうと、投げやりに、あるいは苦々しげに信じているわけである。技術の成果をどう分配するのかが、諸党派の本音の関心事であり、そのために動員されるイデオロギーやらセオリーやらは古ぼけた建前であるにすぎない。誇張であることを承知でいい切れば、つまりはそういうことなのである。

これを「イデオロギーの終焉<sup>しゅうえん</sup>」とか「価値の多元化」とみるのは不適當である。それらの当世風の状況認識には、人々が、たとえば知識人が、いつそう健全になりつつあるとの判断が込められている。しかし、私が思うに、技術の観念が自分の頭の中でひとりで動いているという観念は、精神病理学でいうところの自動症(オートマティズム)にあたるのではない。人間の創り出したものが人間から離れて自動運動を起こすように思われるというのは、あらゆる慣習あらゆる制度についていえることではある。しかし、技術の観念がこうまで強力に、こうまで単調に人々の意識をサハイする<sup>(4)</sup>ようになれば、自我の分裂が多少とも生じるに違いなく、さすれば、それはひとつの症候なのである。少なくとも知識人は、とりあえず仮説としてでも、自分らの健全さを疑ってかかってよい時期なのである。

知識人が権力あるいは社会全体に対する外在的な批判をやめつつあることについては、知識人が一種の自己不安にかかっている<sup>(5)</sup>という事情がある。不安の根は、知識が現状の困難に有効な解決策を出すことができないという点にあるのではない。

もともと、国家間の軍事的緊張や国内の文化的混乱の解決に大きな寄与をなしうるなどと、知識人は考えてこなかった。それをなすには、決断、責任、犠牲、そして虚偽すらも必要なのであるが、一般に、知識人にはそうした能力が不足している。む

しろ、その不足を自覚するからこそ知識人になるのである。自分の言論が世の役に立てば喜びはするが、それを期待せずに言論にとりかかる。良くも悪くも、知識人とはそうしたものであるように思われる。

知識人を自己不安に陥らせる真因は知識の内部にある。知識そのものが政治であり、技術であるということである。ここでいいたいのは、知識が政治や技術といった外部的環境の影響を受けるといったふうな生易しいことではない。そんなことなら、できるだけ努力して知識の中立性を保ちましょうといったおけばすむ。知識は、なんらかの権威づけられ、正統化された思考枠組みにもとづくことによつて公になることができ、そうした知識による限りにおいて知識人の言論が説得力をもちうる。この意味で、知識はまさしく政治的存在である。

また、そのような枠組みにもとづいて、知識が自動的に生産され流通され消費される。知識によつて解き明かされるべき目標とそのため駆使される道具とが定型化されている。この意味において知識は技術的存在である。とくに専門知において知識の政治性と技術性はあらわである。

言葉は真実を探るための手段であるとともに真実を隠すための手段でもあるといったのはヴォルテールであるが、知識人は、おおよそ、前者において生きるのを宗とする。しかし、専門知のもつ政治性と技術性は、<sup>(6)</sup>所与の思考枠組みへ固着することを通じて、真実を隠すように働きうる。すべてというのではないが、いくつもの専門知はすでにそうなっている。そうだと診断が多々出されている。ここからおのずと知識人の自己不安が立ち込めてくる。様々な思考枠組みがいわば真実とのケイリュウを断たれて浮遊しはじめる。

この状況を「思想の相対化」と呼ぶのは適當ではない。様々な思想の様々な思考枠組みの相対関係がいつこうに明らかにされていまいし、されようともしていないからである。

この相対関係を明らかにするには、知識全般に関する知識人の自己解釈、自己分析が必要である。この大して心地よくもなく、見通しも定かでない作業を回避するときに、「言論の悪しき政治化」がもたらされる。

現在における悪しき政治化の本質は、状況の文脈に過剰に依存しながら言葉を操る点にある。状況の文脈に過剰に依存するの

はフアクチュアリズム、つまり事実主義の態度にほかならない。過去の歴史的事実についてであれ、現在の時局的な事実についてであれ、言論界を風靡<sup>ふうび</sup>しているのは、事実、事実、そしてまた事実に関する言説である。事実それ自体が語り続けるかのよう  
に、次から次へと、面白く衝撃的で教訓に富んだ事実の系列が示される。しかし、刺激に慣れてしまうのが人の心理なのだから、フアクチュアリズムの生き延びる道は、大なる可能性で、スキャンダリズムにつながっている。すでにその兆候がありありと  
している、と私は思う。

思い切つていってしまえば、事実そのものなどは無いも同然なのである。事実は私たちの観念によって色づけされている。いわゆる事実の重みというのは、特定の観念が、私たちのうちで常習的に繰り返され、その結果として情性をおびるということなのである。だから、フアクチュアリズムには、常識によって理解されやすいという長所とともに、低俗に流れがちであるという短所がある。思想や理論と呼ばれるものは、事実から離れることができるというのではないのだが、既存の観念を新たな次元から、いわばメタの観念を創造することによって、解釈し直すよう努めるものである。いずれにせよ、思想や理論の乱れが事実によって直接に補われるわけではない。

かつては芸術や宗教が不安を昇華させる対象として選ばれた。芸術や宗教は、知識人が努力して近づくに値する、高級な精神を表していた。いまでは、それらはすっかり商業化されて、しばしば低級かつ凡庸な精神の愛好するところとなっている。またかつては、政治が、勇気という、生の躍動<sup>しんじゆう</sup>を供してくれるために、不安を昇華させる場でありえた。しかし、大衆民主主義の政治は、勇気よりも小心を、理想よりも打算を、そして決断よりも逡巡<sup>しゆんじゆん</sup>を重んじるようにできている。

知識人に逃げ場はない。知識そのものに、つまり自分自身に立ち向うほかに、不安に対処する手立てはないのである。知識人が知識人自身をみつめてみると、どうやら、フロイトの分析が妥当するような幾通りもの病因が発見されるように思われ、自己の不健全を感じとらざるをえない。そして、不健全だとして批判してきた社会の中に批判する当の本人がいるのであつてみれば、自分が不健全なのも当然だと知ることになる。

断っておけば、私はフロイトの信者ではない。フロイトの仮説は、分析的説明というよりも、一種の文学的比喩だと私は思っ

ている。したがって、知識人が語の正確な意味において病理にかかっているというのではもちろんない。

ただ私が<sup>(9)</sup>シサ<sup>(9)</sup>したいのは、知識人が自己の健全さを露ほども疑わずに言論を続ける結果、言論がわれ知らず歪<sup>ゆが</sup>みを呈しているのではないかということである。言論が確実に安定した経路の上を走るなどという保証はまったくないのだと、自覚してかかってよいのではないか。自分らの吐き散らす言葉が言語障害者のそれと、同一でないまでも、ソウドウ<sup>(10)</sup>なのかもしれないと懷疑してみても損はないのである。

端的にいえば、一九五〇年代と六〇年代は理論と詩の時代であった。それゆえ、言論は抽象的なメタ言語（言語についての言語）に傾いて、対象言語（事実についての言語）を軽んじた。事実のもつ確かな脈絡から離れて、科学的あるいは詩的な術語が飛び交った。これに対して七〇年代から現実と散文の時代がはじまった。言論は抽象を嫌い、事実の具体的な脈絡にこだわる。ひとつひとつの言葉の意味を精錬するのは余計なことで、文章の文脈こそが大事とされる。というのも、事実<sup>(10)</sup>は脈絡の中にあり、それを表すのが文脈だからである。

しかし、健全な言葉は両者の均衡として発せられる。対象言語とメタ言語の双方が必要である。語の意味と文脈の結構の両方が保たれていなければならない。この均衡は、おそらく、はかなく移ろいやすいものなのだろうが、均衡を維持し続ける営為が言論の質を保証するのだと私は思う。

（西部邁『大衆への反逆』による）

注 ヴォルテール……フランスの作家・啓蒙思想家（一六九四～一七七八）。フロイト……オーストリアの精神科医・精神

神分析の創始者（一八五六～一九三九）。

〔問一〕 傍線(2)(4)(7)(9)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(1)「言論と政治の間の内的なつながり」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 権力者としての言論人は、政治にとって建設的な仕方では己の言論を展開する義務があるということ。
- B 言論という名の権力を操る知識人は、秩序形成に対して決定的な影響力をもっているということ。
- C 言論行為は、何らかの正統化された権威に基づいて行使された権力の一形態であるということ。
- D 言論行為の本質は、真実の探求でも情報の伝達でもなく、大衆への政治的効果にあるということ。
- E 正統性に基づく言論は、政治の基盤としての人間の信頼関係を醸成する力を有しているということ。

〔問三〕 傍線(3)「政治の底が抜ける」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 言論の悪しき政治化によって、政治に対する不信が惹起じやっきされること。
- B 言論行為の基盤をなす正統性の観念そのものが危機に瀕ひんすること。
- C 言論が権力に対する批判力を失い、権力の暴走を許してしまうこと。
- D 言論を通じた人間の信頼関係が崩壊し、民主主義が失墜すること。
- E 言論行為を本分とする政治が技術的効率性の問題に置換されること。



〔問四〕 傍線(5)「知識人が一種の自己不安にかかっている」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 政治と技術をめぐる時局的な諸問題に対処する実践的能力の不足が広く世間に知られるところとなり、知識人の言論行為の正統性に対する懐疑が生まれつつあるから。

B 政治的かつ技術的な知識に基づいて言論という名の権力を行使する知識人は、自身も権力者の一員であり、権力を批判する資格がないことが明らかになったから。

C 専門知の領域でも技術的効率が支配的となった結果、真実の探求を断念した知識人は、自己の意に反して、言論の悪しき政治化に加担せざるをえなくなったから。

D 知識のもつ政治性と技術性が明らかになり、非政治的な立場から真実を探究するという一種の擬態をとおして確保されてきた知識人の立場が動揺しつつあるから。

E 知識の政治性と技術性を十分に認識した上で真実を探究するという課題に直面した知識人は、この課題の解決法について、いまだ確固たる見通しをもてずにいるから。

〔問五〕 傍線(6)「所与の思考枠組みへ固着する」とあるが、これと反対の内容に当たる箇所を本文中から三五字以上四〇字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。(句読点、かっこも一字と数える)

〔問六〕 傍線(8)「ファクチュアリズム、つまり事実主義の態度」とあるが、これを筆者が批判する理由として適当なものに対してはA、適当でないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 常識的に理解しやすい事実を列挙することで、大衆からの支持と賛同を集めようと企図しているから。
- イ 事実は相対的なものであるにもかかわらず、特定の事実を絶対確実なものとして提示しているから。
- ウ センセーショナルなスキャンダルを暴露しようと競い合う、野卑な言論行為の最たるものであるから。
- エ 状況の文脈を重視するあまり、単なる事実性によって知識の真实性を担保しようと考えているから。
- オ 特定の観念に偏向した恣意的な情報操作をとおして、事実を歪曲わいぎよくしようとする傾向をもっているから。

〔問七〕 次のア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 事実のもつ脈絡を重視しようとする態度は、言論の悪しき政治化の典型としての事実主義を招くものであり、言論の質を保証するために排除した方がよい。
- イ 知識の中立性を守ることが不可能であり、言論行為は、中立性を維持しようとするほど、かえって何らかの党派性とイデオロギー性を帯びてしまう。
- ウ 知識人における自己の健全さに対する懐疑の欠如は、精神病理学にいわれる意味での自動症の兆候の一種であり、知識人の自己不安の一因ともみなしうる。
- エ 知識のもつ政治性と技術性は、知識の成立にとって単なる外部的環境ではなく、むしろ政治性と技術性なくしては、知識なるものそもそも成立しえない。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

協同行為として教育を考察していくについて、同一文化内協同と異文化間協同を対比してみる。

教育が教える者と学ぶ者の間に成り立つ事象だということからすれば、厳密な意味で同一文化内協同としての教育を考えるのは、かなりの困難を伴う。行為様式や思考様式が異なるからこそ、文化伝達としての教育は成り立つように思えるからである。

行為様式や思考様式の集合の持ち合わせは同じなのだが、教育／学習の場面では、一方は「教える」を採用し、他方は「学ぶ」を採用する。これならば、同一文化内協同としての教育が成立したことになる。ただしこの場合は、教える者も学ぶ者も、互いに相手の行為は自分の行為リストの中の一つとしてすでによく知っているのである。教育／学習の中で新たなもの、未知のものは何もないのではなからうか。

相手の教えるという行為型はよく知っているが、教える中身については知らないという場合について考えてみよう。行為様式や思考様式は同じだが思考内容が異なる、つまり同一文化に属しているが文化財としての知識が異なっている場合である。同じ学校文化に属しているが下位区分で教師文化と生徒文化に分かれており、両者は知識の量及び質において明らかに違いがあるのである。

同一文化に属しているということは、「教える／学ぶ」の相補型行為を行うについては同意している(学校とはそういうところだ)のであり、知識量の多寡は教育伝達をより滑らかにするであろう。同意していても知識内容に差異があれば、伝達は生じようがなく、そのことは翻って「教える／学ぶ」の学校文化への同意<sup>(1)</sup>そのものを危うくするであろう。

以上から、同一文化(学校文化)内協同としての教育は、逆説的であるが、教師の持つ文化財としての知識と生徒のそれとの間に差異があるときにこそ成立することになる。

異文化間協同としての教育を考察するに当たっては、異文化性の水準を正確に区分けしておかなければ無用の混乱を招くだけ

う。

第一の水準は、先の同一文化内協同でも述べた、教師と生徒の知識の質と量の違いをもって異文化と見なすものである。協同は容易である。

第二の水準は、教える行為と学ぶ行為の相補性の了解はできていないが、自分自身の教える行為の様式あるいは学ぶ行為の様式はしっかり身につけている状態である。この場合は、教える行為／学ぶ行為の相補性をまさしく協同行為として構築していかなければならないことにある。課題は (2) である。

第三の水準は、「教える／学ぶ」の相補性はおろか、自分自身の役割行為さえも身につけていない状態である。教師は大人文化は持っているので、生徒を子ども扱いするが、教える行為の様式が身につけていないので、生徒を教えることができず、仕方なしにやみくもに支配統制しようとする。生徒の方も学ぶ行為の様式が身につけていないので、教師の支配の企図に対して、反発して対抗文化を構築するか、逆にまったく従順に被支配に甘んじるかである。後者の場合は何とか協同らしい外観を取るが、前者の場合はいかなる意味でも協同は成立しない。なお、支配／被支配の関係が成立したとしても、これが異文化間教育であるかどうかは吟味を要する。先述したような、同一文化内協同に過ぎない可能性があるからだ。

互いの文化の相互学習が円滑に進行していった場合でも、二種類の違った結果が起こりうる。文化融合と文化総合である。文化融合が帰結するのは、相互学習が相手の思考様式や行為様式を対象化して学習するのではなく、相手の主観的な姿勢や主体的な姿勢に情感的に同一化してしまう場合である。行為様式全般における一体化が起こる。もちろん客観的な形態の合致が問題ではなく、主観的な行為遂行意識あるいはそれを遂行している自己の意識の自己融合の問題である。本人の思い込みの事実である。文化総合と呼んだのは、ここで除外したもの、つまり相手の思考様式や行為様式を対象化して学習し、客観的な行為様式全般において極度の自己類似が起こる場合である。これは必ずしも上記の文化融合を排除するわけではない。まれには主観面でも客観面でも、自己融合が起こることがある。

教育としての文化交流現象を葛藤含みのものと調和的なものに区別できるが、(3)は少なくとも表層では調和的であり、(4)は客観的対象認識に際して多少とも葛藤を伴う。なぜならば、他者たる主体を客観的認識の対象として扱うからである。

教育効果、学習効果の観点からは、(5)の方が得るところが大きい。相違点を認識しつつ合一しようと努めるから、文化の拡張が起こるのである。

(6)の場合、そこにとどまるならば、せいぜいのところ心の平静を取り戻す効果が見込める程度である。しかし見方によっては、これこそが大切である。というのも主観的世界においては、当人の行為様式の全般は他者のそれと調和する方向で変容しているのだから、準拠集団への帰属欲求は充足されるし、自ずと文化形態も安定して行くことが見込めるからである。主観的内容が準拠集団の受け止めによって客観的内容となってくるわけである。

Aという子ども集団がサッカーというスポーツ文化を持っている。Bという子ども集団がドッチボールというスポーツ文化を持っている。AとBの出会いにおいて、一方が他方に魅了されてしまい、皆がいつせいにサッカーをやりだした、あるいは逆にドッチボールをやりだしたという場合は、文化融合が起こっている。これと違って、両方の遊びの特徴を生かしたような新しい遊び、例えば手を使えるサッカー（ハンドボール？）のようなものを発明して皆でやりだしたような場合、文化融合が起こったと言えるだろう。

学習について語る場合、モデルをまねる形のものが多い。ここではせいぜいのところ文化融合が起こっているだけで、文化融合が起こるには至っていない。文化融合が起こるには、双方の文化がほぼ対等な魅力を持っていることが条件となろう。両者の間での緊張関係が、新たな遊びの創造の温床となるのだ。

（岡田敬司『共生社会の教育学』による）

〔問一〕 傍線(1)「学校文化への同意」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 教育／学習の場面にある教師と生徒の知識の量及び質の差を、相補型行為によって少なくしようとする意識を両者が共有しているということ。

B 教える側と学ぶ側に知識の量及び質の差があり、加えて行為様式や思考様式に関して両者の間に相互的理解が得られているということ。

C 教師から生徒への知識の伝達の円滑化が、学校のあり方への理解の促進につながっていくことを両者がよく認識しているということ。

D 教師文化と生徒文化の行為様式と思考様式の相違が、知識量の多寡により相補型行為に変容することを両者が理解しているということ。

E 教師も生徒も知識の伝達の困難さを認めつつも、相補型行為を行うことにより共に文化伝達としての教育の可能性を追求するということ。

〔問二〕 空欄(2)に入れるのにもっとも適当な語を左の中から選び、符号で答えなさい。

A 対立緩和

B 相互調整

C 伝達行為

D 自他類似

E 交流促進

〔問三〕 空欄(3)(4)(5)(6)の組み合わせでもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- |   |          |          |          |          |
|---|----------|----------|----------|----------|
| A | (3) 文化融合 | (4) 文化融合 | (5) 文化融合 | (6) 文化融合 |
| B | (3) 文化融合 | (4) 文化融合 | (5) 文化融合 | (6) 文化融合 |
| C | (3) 文化融合 | (4) 文化融合 | (5) 文化融合 | (6) 文化融合 |
| D | (3) 文化融合 | (4) 文化融合 | (5) 文化融合 | (6) 文化融合 |

〔問四〕 次のア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 文化融合としての学習は、自文化にない価値を他文化に見出し、両者の間の文化形態の相違点をどちらか一方が客観的な立場で肯定することで成立する。
- イ 支配／被支配の関係のせめぎあいの過程で生じた教師とそれに反発する生徒との対立は、両者が教える／学ぶの相補型行為を了解することで解決する。
- ウ 文化融合は、自己と他者の文化の魅力がほぼ対等なのが成立の条件であり、双方の文化の緊張関係が新たな創造の温床となる場合に成功したと言える。
- エ 自分自身と相手の思考様式・行為様式を互いがどのように捉えているのかによって、文化交流現象としての相互学習の結果は違った形で現れてくる。

三 次の文章は、後三条帝について書かれたものである。後三条帝は外戚に藤原摂関家をもたないため、東宮の時代が長かった。これを読んで、後の問に答えなさい。(30点)

東宮におはしましける時、中納言匡房まことむねまだ下臈げらふに侍りけるに、世を恨みて、「山の中に入りて、世にもまじらじ」など申しければ、経任つねたよと聞こえし中納言の、「われはやむことなかるべき人なり。しかあらば、世のため身のため、くちをしかるべし」と諫めければ、<sup>(1)</sup>宇治の太政大臣心得おほきおとしと思ほしたりけれど、東宮に参り給ひければ、宮も喜ばせ給ひて、やがて殿上して、人の装まひなど借りてぞ、簡たにもつきける。さて夜昼、文の道の御友にてなむ侍りける。位につかせ給ふ初めに、つかさもなくて、五位の藏人くらひになりたりければ、藏人の式部大夫とてなむ。空きたるに従ひて、中務の少輔せふにぞなり侍りける。

大式実政だいにさねまさは、東宮の御時の学士にて侍りしを、時なくおはしませば、<sup>(2)</sup>かまへて参り寄らぬ事にならむと思ひけるに、<sup>(3)</sup>さすがにいたはしくて、甲斐守かひのかみに侍りければ、かの国より上りて参るまじき心構へしけるに、下りけるはなむけ餞はなむけせさせ給ふとて、

くにの民たとひ甘棠かたうの詠をなすとも 忘るる事なかれ多くの年の風月の遊び

と作らせ給へりけるになむ、<sup>(5)</sup>え忘れ参らせざりける。甘棠の詠とは、唐国からに国の司なりける人の宿れりける所に、山梨の木のの生ひたりけるを、その人の都へ返り上りて後、まつりごとうるはしく、しのばしかりければ、「この梨の木切る事なかれ、かの人の宿れりし所なり」といふ歌を歌ひけるになむ。

さてみこ、位につかせ給ひて後に「左中弁ひだりなかつに加へさせ給へ」と申しければ、「つゆばかりもことわりなき事ことおぼすまじきに、<sup>(7)</sup>いかでかかゝる事は申すぞ」。正左中弁ただひだりなかつに初めてならむ事あるまじき由仰せられければ、藏人頭くらひのちうにて資仲すけなか侍りける、重ねて申しけるは、「実政申す事なむ侍る。木津こづの渡りの事を、一日にても思ひ知り侍らむ」と奏しければ、その折、覚ししづめさせ給ひて、はからはせ給ふ御けしきなりける。

むかし実政は、東宮の春日の使にまかり下りけり。隆方たかかたは弁ひだりなかつにまかりけるに、実政まづ船など設けて渡らむとしけるを、隆方押し妨げて、「待ち幸ひする者、何に急ぐぞ」<sup>(8)</sup>など、ないがしろに申し侍りければ、からく思ひて、かくなむと申したりける



を思ほし出だして、この事ばかり天照大神に申しうけむとて、左中弁には加へさせ給ひてけり。<sup>(9)</sup>

〔今鏡〕による)

注 東宮……皇太子。 匡房……大江匡房。 経任……藤原経任。 われ……ここでは二人称代名詞。 宇治の太政

大臣……藤原頼通。 簡……名札。 実政……藤原実政。 学士……東宮に経書を講義する師。 甘棠の詠……為

政者の徳を讃え引き留める歌。 左中弁……左弁官局の次官。 資仲……藤原資仲。 木津の渡り……木津川の渡

し場。 春日の使……春日神社の祭礼に派遣される勅使。 隆方……藤原隆方。

〔問一〕 傍線(1)に「宇治の太政大臣心得ず思ほしたりけれど」とあるが、頼通がそう思った理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 匡房のことを立派な人物だと評価していなかったから。
- B 経任の人を見る目に対し信頼を置いていなかったから。
- C 匡房を自分の側近として働かせたいと考えていたから。
- D 東宮が自分より匡房を信用するようになると困るから。
- E 優秀な人物が東宮に仕えるのを快く思わなかったから。

〔問二〕 傍線(2)(3)(4)(6)の解釈として、もっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(2) 「時なくおはしませば」

- |   |                     |
|---|---------------------|
| A | 実政は東宮御所に参上する時間がないので |
| B | 東宮にはなかなか自由な時間がないので  |
| C | 実政にはなかなか出世の機会がないので  |
| D | 東宮は失意の状態でいらっしやるので   |

(3) 「かまへて」

- |   |       |
|---|-------|
| A | きつと   |
| B | わざと   |
| C | 注意して  |
| D | 不本意にも |

(4) 「さすがにいたはしくて」

- |   |             |
|---|-------------|
| A | やはり大臣に気兼ねして |
| B | さすがに実政も苦しくて |
| C | やはり東宮がお気の毒で |
| D | 思い通りにはならないで |

(6) 「おぼすまじきに」

- |   |              |
|---|--------------|
| A | 考えるべきではないので  |
| B | 全く考えもしなかったのに |
| C | お思いにはならないので  |
| D | 思うことすらできないのに |

〔問三〕 傍線(5)「え忘れ参らせざりける」とあるが、その内容としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 実政は東宮との長い月日を忘れ参上することができなかった。
- B 実政は甲斐の国司としての生活を忘れることができなかった。
- C 実政は東宮の側で過ごした日々を忘れることができなかった。
- D 実政は東宮との約束を忘れ参上することができなかった。
- E 東宮は実政との日々を忘れ甲斐国から呼びよせなかった。

〔問四〕 傍線(7)「かかる事」とあるが、具体的に何を指すか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 帝に直接お願いをすること。
- B 理由のないことをすること。
- C 左中弁の人数を増やすこと。
- D 実政を左中弁に任じること。
- E 梨の木を切ってしまうこと。

〔問五〕 傍線(8)「待ち幸ひする者、何に急ぐぞ」とあるが、このように言った意図は何か。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 実政が左中弁に任命されないことを隆方が馬鹿にしている。
- B 実政より先に船に乗るために隆方が急ぐ理由を述べている。
- C 実政が船の順番を待っていることを隆方がからかっている。
- D 東宮が太政大臣に遠慮していることに実政が同情している。
- E 東宮がなかなか天皇になれないことを隆方が皮肉っている。

〔問六〕 傍線(9)「左中弁には加へさせ給ひてけり」とあるが、後三条帝はなぜそうしたのか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 自分を馬鹿にした隆方を排除したいという実政の気持ちが分かったから。
- B 隆方が実政だけでなく後三条帝自身も侮っていたことを思い出したから。
- C 実政を特例として左中弁にすべきだという天照大神の託宣があったから。
- D 実政を左中弁に出世させてあげたいと願う資仲の友情に心打たれたから。
- E 甲斐国でも自分のことを思っていた実政に報いたい気持ちがあったから。



